
君と一緒に生徒会っ！

雄花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と一緒に生徒会つ！

【Zコード】

Z2003E

【作者名】

雄花

【あらすじ】

このお話は、ちょっと黒い主人公と、おバカでハチャメチャな生徒会長と、無口で意味不明なことをたまに呟く副会長と、天然でドジでマヌケな書記と、その他生徒役員による、バトルありの笑いありの学園コメディー物語です。by エンル

プロローグ

「うーん、どうしましょつか・・・」

少女は、窓を見つめながら唸っていました。

どうしたんです? かいちよー

少年が少女に駄に一回頭を傾けました

少女は二ヶ月と喰ているだけでは

生徒会の会員が少ないので、思ひもよらぬ事態が起つた。

簡単には・・・・

「でも、少ないのよ――――――」

少女は、よくテレビで見るちゃんぶ台をひっくり返す真似をしながら、声を張り上げました。

いや、そう訊問されても……と、少年は困った顔をしています。

少女は、さほど落ち着かないのか、辺りをハリハリはじめました。

どうかはしないのか

だんだん、歩く距離、スピードが速くなつていきます。

「『ど』かにいないものか——！——新しい『人材』！——」

「うおおおおおー……と、少女は叫びました。

それを必死で、少年は止めに入ります。

「お、落ち着いてください！かいちよー！——」

少年の声も届かず、少女はただ暴れています。

「え、えと、聞くと一年に『転校生』が来るとかー！——」

『転校生』といつ言葉を強調して、少年は大声を出します。

その言葉で、少女は「しん・・・」と静かになりました。

「ええつ——！——ほんとつ——！——？」

少女は、嬉しそうな顔を少年に近づけます。

「ハイ。本当です。」

にじりと、少年は天使のように微笑むと少女から一歩離れました。

少年の頬が微妙に、赤色に染まつていました。

「よーしーーー期待してんだからねー！——『転校生』！——」

少女は、一人つきりの部屋でいなはずの『転校生』に呼びかけま

した。

「近づくな、
変態」

暗い路地裏。少女が一人・・・男の人たちに囲まれていました。

三人ぐらいいるでしょうか・・・?少女も辛口で男たちに反抗しますが、男たちは聞いてくれません。

「そんな」というなよ、優ちゃん」

三人の中の一人がニヤニヤしながら、少女に近づきます。

少女は危険を感じたのか、一歩下がるうとしました。だが・・・少女の後ろはコンクリートで出来た壁です。逃げられそうにもありません。

「さあさ、オレたちと楽しいといいく・・・

男が、肩を掴もつとしました。

「やめてよつ・・・」

少女がそう叫んだとき、男の一人が気絶していました。

他の二人は、目をまん丸くして少女を見つめました。

『なにをやつたんだ・・・譲ちゃん・・・』

そう、言わんばかりの表情をしていました。

「私に・・・近づかないで?お願いだから。」

笑顔で、そう少女は言いますが、一人は少女が怖くて怖くて足ががたがた震えています。

少女が怖くてしょーもないのです。

「う、ごめんなさ・・・い

男の一人が謝りました。一人が謝ると、もう一人も口には出しませんが頭をぺこぺこ下げています。

「じゃあ、さつさと帰れ。」

二人は涙目で、額くと、ぴゅーとゴキブリの如くその場から立ち去りました。

少女は、一人が帰ったのを見るとふーとため息をつきました。

「世の中腐つてんねえ・・・」

その夜は、星がくつきりと輝いて見えました。

プロローグ（後書き）

こんにちは、これからも宜しくお願いします！

作者からお願いです。

ただいまキャラ募集しています。

キャラの名前・性別・その他いろいろ・・・を書いて、感想の中など、連絡フォームで作者にください！

でわ、待ってます！

その1番「天使つて・・・」

気持ちのいい朝です。

私の名前は、エンル。職業は天使です。

私のこれからのは仕事は・・・そう、ある人の人生をずっと見る事・
・・です。

長いようですが、短い仕事なんですね。こういう仕事が一番多いんですね。

私は、どれくらいの人の人生を見てきたでしょうか・・・?

百歳まで生きたもの、悲しい過去を持った者、事故で急に逝ったモノ・・・

たくさんいました。たくさんいて、たくさんあつて……

その人それぞれの「一色」がありました。

やの無むいでも結麗て、透徹して、……

これから、私が見ていく人の人生はどんな「色」なんでしょう・・・

とっても楽しみ・・・でもあり・・・切ない・・・です。

「いいじゃないかー、オレはお前の・・・」

「ただの兄でしょおおおーー！」

少女と、青年が、砂煙を出しながら凄いスピードで駆け抜けていきます。

あ・・・この女の子が私がこれから見る人ですか・・・

たしか、名前は・・・「ゆずわかゆう柚若優」さんでしたね。

天使ノートにも書いてありますし。

で、優さんを追っているのは優さんの兄の「ゆずわかもつ柚若猛」さんですね。

・・・猛さんにとっては、愛だと想つのですが、それ嫌がらせにしか見えません・・・

ストーカーと言つものじゃないでしょつか・・・

「死ねえええーーー」の、へそ兄貴いいいーーー

「酷いよー、兄に向かってー」

「今日から学校なのーーだから、付いてこないでーーー」

「えー、やうなのーー」

「やうーーイエスーーマイティーーーだから、帰れえええーーー」

イエス・・・?マイティー?何でしょ?・・・その言葉は・・・可笑しい英語ですね・・

優さんは、少し黒いみたいです。

それに、猛さんの事、嫌いみたいです。

その後も・・・優さんと猛さんとの、激しい戦いが続きました・・・

やつと、学校に着いた優さんは、暗い森の中に居ました。

優さんは転校生で、今日から「水鏡高等学校」にこれから通うみた
いです。

この学校の隣にある、「水島男子高等学校」、「みやこじょとうがく」
「水葉女子高等学校」があります。

全ての学校名に「水」という言葉が付いているのは、この町、「水
煙町」が水は豊かだからそうです。

その他にも、いろいろな説が取り上げられていますがね。

でもなぜ、優さんはこんな暗い森の中に居るのでしょうか・・・。
?

近づいて、様子を見に行っていましょう。

さつきまで、宙にいたのですが、地べた・・・つまり地面に足をつきました。

どーしたんですか～、優さん。

口こぼれ出しませんが、パクパクと口を動かして云えようと思います。聞こえるはずないんですが、人間には、私達の姿は見えないのです。

私が、優さんの周りで口をパクパクさせて様子を見ていると、優さんが急に笑い始めました。

「つこに捕まいたぞーーー！コスプレ女ーーー！」

そう言つと、私の体はガシリと、優さんの手に掴まれていきました。

解こうとしたのですが、解けません。

あ・・・もしかして優さんって

「さつきから、私の後を付いて来て！ストーカーよ、ストーカー！」

私の姿が見えるんですかーーー！

私は、じたばた暴れます。

基本、天使の体は小さいものなのです。

身長は、人間で言つと幼稚園の年中ぐらい・・・小さいんです。

もちろん、優さんより小さいです。

「もしかして、幼稚園生！？・・・・」めんなさい、私が悪かったです。」

優さんは、私を人間の幼稚園生と勘違いして私から手を離しました。

天使ですからね、人の心理ぐらい読めますよつ！

「あの～、私が見えるんですか・・・？」

恐る、恐る聞いてみると、優さんは「はあ！？」と私を驚いた目で見ました。

言葉に出さなくとも、目で分かるものなんですね、気持ちつて。

・・・・ちょっと、優さん、引いたみたいです。

「え～と、大丈夫？頭。」

「いい」と、優さんは、自分のおでこを人差し指で指差しました。

頭大丈夫？という意味なんでしょう。

「私、天使なんです。そして、私はあなたを見る仕事を『えられたんです。』

見えてしまったものはしょうがない。私は、自分の正体 天使だといふ事を彼女に話しました。

そして 自分の仕事であなたを見続けるといふことも。

優さんは、ぽかんと口を「お」の形に開けて、しばらく呆然としていました。

「え、えと・・・戦 物の見すぎじゃない?君。」

「だから、違いますっ!..」

「だつて、天使つていうなら翼とか生えている・・・」

人間はこう、勝手にイメージするのが少し嫌いです。

なんで、どう考えたら、背中に翼があることになるのですか。

まつたく・・・ふう〜・・・

まあ・・・今回は、天使だといふ事を信じてもらつために・・・空を飛んでみますか。

私は、つま先で立ち、軽くジャンプをしました。

そして、イメージするのです。

自分が空を飛んでいるイメージを・・・

「う、うあ・・・飛んでる――――」

優さん、さすがに驚いていますね。

腰を抜かして、びっくりしています。

「これで、信じもらいましたか？」

「うん、うん」と、優さんは首を縦に振りました。

田をぱちり開いて、あんぐりと口を開いた顔で私を見ています。

・・・私がそんなに珍しいですか？

珍しいかも・・知れませんけど。

「私は、エンル。あなたの名前は知っています。・・・優さん、これからお願ひしますね？」

「は、はあ・・」

まだ、驚いた顔をしています。

さう・・・今まで、私と優さんの一人だけだった静かな暗い森に、足音が聞こえました。

「独り言が多いのね。」

その少女かと思えるその声は恐ろしいほど透き通っていました。

私と、優さんの頬に汗が一筋、流れました。

「私は、檜内 潤奈。この学院の生徒会長」

嫌な予感、そして、波乱の幕開けの感じがしました・・・

その2番「嫌な予感・・・」

「そ、それはきっと・・・空耳ですよー空耳」

優さんは、突如現れた少女 潤奈さんに笑顔を見せました。

しかし、潤奈さんのその冷たい、落ち着いた表情は変わりません。

ねえ

潤奈さんは、優さんに近づきました。

「お願い、生徒会に入つて。」

潤奈さんは優さんの手を握り締めます。

その田中からちら輝いていて、眩しく思えた。

力チツ！

なにかのスイッチが入る音が聞こえました・・・

嫌な予感・・・私は、優さんの顔を見ました。

「嫌に決まっているでしょ？後、顔近い。触らないで、私に。」

冷たくなりました――――――――

もしかして、さつきのスイッチが入る音つて・・

優さんだつたんですか――――！

黒くなりますスイッチ。ですね、これ。

「えへ、そんなこと言わなこでわつ、へつてよ　」

わつわまでの清楚の感じが――――！

なくなつていますーなんか、ハチャケタ感じになつています！

「嫌つていつてんでしょ、このデーテカ」

優さんは、わつわと潤奈さんを足で蹴り飛ばしました。

黒い、黒いですよ・・・優さん・・・

「デーテカつて酷いなー、お願い。」

潤奈さんは、優さんの手を引っ張りました。

「ひ・・・だから・・・触るなつて言つてるだらあおおお――――！」

優さんがそついたとたん、優さんの手前の地面が深く穴が出来て
いました。

潤奈さんは、これを見て危険を感じたのか、逃げていきました。

潤奈さんの顔が微妙に笑っていたのは氣のせいでしょうか・・・？

「・・・優さん、もしかして　　」

「あ、分かった？」

優さんは、やつきまでの姿はなくなり、微笑みました。

「私も、生まれ持つての怪力なんだ。」

薄暗い部屋の中 さきほど、優さんに生徒会に入るよう頼んだ潤奈
さんがいました。

薄暗くて、よく分かりませんが、潤奈さんの後ろには三人、人がいます。

「へへ～！あの子すつ」こ～！なにあの怪力つー。」

「落ち着いてください、かいちょー」

少年が、止めに入ります。

笑顔で、潤奈さんを止めに入りますが、潤奈さんの興奮は止まらないようです。

「確かに、あの子すごいですね。潤奈さつ・・・・・」

もう一人の小柄な少女は、そういつた途端足にカーペットを引っ掛けてしまいました。

ドダン！といつ音が静かな部屋に響きわたり、少女は鼻を押さえながら立ちました。

少女の隣にいる、無愛想な顔をしている少年は黙つて見ているだけです。

「よーし！なんとしても！あの子を入れさせるわよ——！——！」

潤奈さんは、大声で叫びました。

周りにいる、三人は少々苦笑いしながら潤奈さんのことを見ていました。

「で、でも、『アレ』を持つている人間は……」

「もお、黙りなさい、音葉^{おとは}この子の怪力^{おとこ}があれば、『能力者^{エスパー}』がどうとか関係ないでしょ？」

「それもそうですが　彼女も困るのだと想つのですが。」

潤奈さんの、体だけ……時が止まりました。

音葉^{おとは}と呼ばれた少年は、相変わらず苦笑しながら潤奈さんを見ています。

「音葉くんの言つたこともあると思うけど、怪力だけじゃあ和泉^{いずみ}たちには付いてこれないと思うけどな」

小柄な少女の発言で、潤奈さんの周りの空気が冷たくなります。

「わー、じゅあれ、つかればこじゅなー、あのトトー。」

「ちゅつー。それは、いくらなんでも

「今更・・・やめな」

音葉くんの止めと、今まで無口だつた少年の一人が潤奈さんの計画を危険と感じたのか、説得しています。

潤奈さんの周りは、いわせへなり始めました。

音葉くん、小柄な少女、無口な少年の声が合いました。

(会長の命令は、どんなことでも従う……)

この考えは・・・間違っていると思いますが

「んな」と「」の因人はやるのでしょうか・・・?

どちらにしても優さんのことですよね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2003e/>

君と一緒の生徒会っ！

2010年10月21日16時50分発行